

兄弟子の浄頭房、義浄房は、待っていたこの説法の座に列して、にんやりと会心の笑みを含んでいた。

何を言ひ出すかと緊張している、浄円房、円密房、円智房、実成房等々の先輩の顔。地頭の東条左衛門尉景信が従者四、五名を引きつけて厳然として着座している。山の麓の旦徒も、自分達の寺から地頭様さえ、わざわざ聴聞にくるような、立派な坊さまを出したことを誇るような顔付であった。

莊重な経文の読誦が終わると、ものやわらかい蓮長法師の声が続いた。

「十二か年もの長い間、この山を留守に致しましたので、私をお見忘れになった方もあるかも知れませんが、私が蓮長でございます。師匠道善御房並びに一山の諸先師諸先輩の御理解または、地頭東条左衛門尉殿以下檀徒の方々の並々ならぬ御後援によりまして、叡山十二か年の学生としての生活をつつがなく終了いたし、今般このなつかしい千光山清澄寺に帰山致した次第でございます。

都の生活は、ここ房州の日々毎日とは大いに異なりまして、珍らしい土産話も多々ございますが、そのような話は一切この講座では遠慮いたしましたして、鎌倉に三か年、叡山に十二か年、計十五か年間、何を学び何を感得したかを、御報告いたすことが、皆様の一方ならぬ御厚意に対する御報恩と思ひます。

さて先刻拝読致しましたのは法華経寿量品の首文でございますが、何故本日この寿量品を拝読いたしたか、また「汝等あきらかにきけ如来の秘密神通の力を」と拝読せざるを得なかつたかを申し上げれば、ここに十五年間研鑽の結果を御報告いたすも同然なのであります。

私こと十二歳にして善日曆としてこの清澄山に登り十六歳の時、道善御房より、是生房蓮長と名を賜つて出家得度致しましたが、その頃より一つの疑問を持ち始めました。その疑問は年を経るに従つて成長し、いろいろと山内の先師先輩に問いたしましたが解決いたしません。「年をかされればおのずと会得する」これが皆様一様の答でありましたが、それでは自分で納得いたすことができませぬので、先ず始めに鎌倉遊学三か年のお許しを得て勉強いたし、更に十二か年、皆様の御後援を得て叡山に遊学いたし、その間、園城寺、東寺、高野山、四天王寺等々に学んで今日に至つたのであります。

では、その疑問を解決し得たかと、皆様は反問いたすであります。蓮長ござかしきことを申すようであります。胸中に不安を持してこの講座に登り、脳裡に疑問を蔵して経文を誦する者ではありません。では、蓮長をしてこれ程までに苦しめた疑問というものは一体何んであったでしょうか。

釈迦一代の教えにもかかわらず天台真言禅念仏等々、十指に余る宗旨宗派が、皆われを是とし彼れを非とするの不思議さでありました。仏教に志してこれを疑問とせざれば外に疑問はありま

せん。

これは何故かと各々の宗派宗旨を悉くたどりました処が、一つの共通な原因を探ぐりあてたのです。

それは各宗の祖師といわれる方々が、御自分の意見をもって經文を拝読しておるのであります。これによつて宗旨宗派を建てておるのであります。宗旨宗派の奥底をきわめましても、それはその宗の祖師元祖の心持であつて、仏の真意ではないと会得いたしましたので、改めて一切經に私心を去り公平の心をもつて、仏様の説法の順序に従つてこれを漸次に研鑽いたしました。

しかるに法華經の開經である、無量義經に
「種々の法を説くに方便力を以てす。四十余年未だ眞実を顕わさず」とありました。

この經文を皆様はどう思いますか、釈尊は三十成道以来七十二歳にしてこの無量義經を説いております。

してみれば、とりもなおさずこの無量義經以前の經文は聴衆の耳をこやすための方便の教、眞実に至るの仮りの教、即権門の教であるということになります。では何故そのような方便の教えを態々設けたのか、理由は仏様がはつきり断言されております。

「説く時、いまだ至らざる故なり」

と方便品にあります。そして、

「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」

と同じ方便品で言われております。

ではその無上道とは何か、凡べての人々が仏になるの道であります。

凡そ仏教を信ずる者の目的はこの成仏にあります。これ以外は枝葉末節でありますから、仏も方便の教と言われたのであります。法華経こそ無上成仏を談ずる唯一の經典也と仏が言われておるのであります。

これはいずれの宗旨の祖師方も否定することの出来ぬ仏御自身のお言葉であります。しかるに現実はどうでありますか。この仏説と天地水火の相違なのであります」

